

東北震災復興レポ～ありのままで～



進む復興、
進まぬ復興……

進む圃場整備（奥の丘陵はかさ上げ用に土取りするため、古代の製鉄遺跡を発掘調査中）

東日本大震災発生から三年半が経ち、復興もようやく目に見える形で進みつつある。岩手・宮城・福島の三県では、今年度も多くの文化財専門職員が集まり、復興事業に伴う埋蔵文化財の調査に邁進している。

中でも、最も急がれたのが住宅関係である。災害公営住宅や防災集団移転地の埋蔵文化財調査は、設計を変更して遺跡を保護したり、調査工程を協議して、遺跡のない箇所から工事を進めたりして、なんとか峠を越えつつある。岩手や宮城では今年度が調査のピークで、その成果に目を見張るものがある。一部は「発掘された日本列島」展でも紹介されるので、この冬に九州にもやってくる列島展を是非見ていただきたい。

福島でも、津波の被害を受けた水田をよみがえらせる圃場整備に伴う試掘調査や、災害公営住宅関係の発掘調査はピークを越えた感がある。ただ、福島の場合は他の二県とは異なり、原発事故による影響で、未だに避難を余儀なくされ、具体的な復興

興計画が定まらない地域が多く存在する。埋蔵文化財も今後どれだけの調査が必要か、見通しが立ちにくく、まだまだ道のりは遠い。復興の進んでいる地域とそうでない地域の差が開いていつているのが実状だ。

南相馬市では南部の小高区が現在「避難指示解除準備区域」である。放射線量は低く、再来年の帰還を目指しているが、未だに大規模半壊の家が多く残り、津波被害の爪痕が残ったままである。まだ住むことはできないが、それでも墓地はいち早く修復され、お盆にはお参りに訪れる人も多く、先祖代々の



避難解除準備区域では未だに大規模半壊の家が多く残った状態



災害公営住宅（調査が終了した写真の左側にも建設予定）

の土地への愛着が強く感じられる。

同市の原町区では、今年7月に縄文時代と古代の集落跡の現地説明会が行われ、過去最多の人数が集まった。先祖が生きた証、自分達の郷土の歴史といったものが、被災地で復興が進む今まさに求められていると言える。震災直後は文化財の発掘調査が復興の妨げになるのではとの声もあったが、現在では理解が多く得られ、復興も文化財の保存・調査も両方進んでいる。

なお、平成二七年度までが当初の「集中復興期間」、避難区域以外では今後急ピッチで復興が進むと思われる。（福島県（派遣中の宮地支局長）